

非社会的行動を示す子どもの精神医学

平井信義



上の参考としたい。

はじめに

幼稚園や保育所という子ども集団の中で、不適な行動を示す子どもについて考える時、社会を単位として、反社会的行動 anti-social behavior と非社会的行動 a-social behavior に分けることができる。反社会的行動が、友人に対して暴力を働いたり、集団の中のルールを破って行動したりするのに対して、非社会的行動は、いわゆる「引込思案」とか「内気」といわれる行動であり、積極的に集団の中に入ることができず、あるいはそれを避けたりする行動となる。

われわれは、すでに七年間、「引込思案の子どもの合宿治療」を中心に、非社会的行動を示す子どもの問題の解明に努力してきた。そして、わずかの知見を得たのでそれらを報告し、保育

(一) 一つのエピソード

Y君という六才の男の子、次の理由により、就学猶予をしている。その一つは、非社会的行動——幼稚園にいつているが、母親からなかなか離れないという。第二は、肉食ができず、無理に食べさせると嘔吐する。従って、学校給食に耐えられないと母親は考えている。第三は、不潔恐怖。不潔なものを極度に嫌い、ある時には不潔なものを見ると吐くこともあるという。以上のことから、医師によって神経症という診断を受け、投薬してもらっていた。しかし、このままでは、来年の就学もあやぶまれる。何とか工夫がないものか——という相談であった。

そこで、引込思案の子どもの治療のために設営する夏期合宿

に誘い、母親はそれを諒承した。

合宿を始める前に、治療者や子どもどうしが親密になるために集合して遊ぶ。それに誘ったが、A君は友だちの仲間入りをしない。私も何回か誘ってみたが、その度に母親の手を握り、うしろに隠れてしまう。三回の集合とも、同じような状態であったが、私の誘いには多少関心を示すように、横目で見ることもあった。

しかし、このような状態では合宿に連れていくことはできない。出発の朝、母親から離れようとはしないであろう。無理に連れていけば、ショックが大きく、合宿中泣き通しになるかも知れない。私は思案した。母親もどうしてよいかわからないという。そこで、一計を案じた。「出発の朝、お父さんに連れてきてもらってはどうぞでしょう」私の提案に、母親もうなずいて「私よりもよいかも知れない」といったが、しかし、成算はないという。とにかく、その日待つことにした。

私も連れていくことは困難なことだと思ったが、その日待つことにした。ところが、出発の朝、車で子どもたちを待っている私の目に、父親に連れられて私の方に歩いてくるA君の姿を見たのである。その手には、捕虫網を持っていた。私はうれしさの余り、走るように近寄って「おはよう！」といった。その時、A君は捕虫網の棒のところで、私の頭をホカッとなくつ

たのである。父親は、びっくりしてA君を叱ろうとした。しかし、私は目くばせをして、黙ってみて欲しかった。A君は、二回、三回——と私の頭をうった。このようなことに慣れている私は、打たれ方もじょうずである。しかも、子どもが親密感を持ち始めた時、このような表現をとることがある。とにかく、駆にきてくれたうれしさは、私の心をすっかりとらえていた。

そのあと、A君は他の子どもが集合しているまわりをうろろしていた。並んで改札口を通り、汽車に乗り込むことも無事にいった。いよいよ出発。車窓の外には、父親が別れを惜しんでいる。泣きそうな顔にうつっている。しかし、A君はその方を振り向こうともしないで、持ってきた玩具をいじっている。どんとんと汽車は東京を去る。A君は、淋しそうな様子もしい。これは一体どうしたというのであろうか。

私の斜め向かいにすわっていたA君は、しばらくすると、「先生、のどが乾いた！」といった。「水筒の水をのんだら」と私がいうと、それに気付いたように水筒のふたを廻して口をつけてのもうとした。しかし、水筒の中をのぞき込むようにして、「先生、きたないよ！」といった。「どれどれ」と水筒を受けとると、私も中をのぞき込んでみた。水はきれいである。しかし、内壁に、フレスをする時についたのかさまざまな模様がついてい

る。それを見て、きたないといったのだからということに気付いた。そこで「これは、模様だよ」といって、水のきれいなことを証明する意味で、一口のんでみてから、A君に返した。すると、A君はすぐに口をつけて、ごくごくと水をのんだのである。それを見て、不潔恐怖症であるはずのA君を、見直さなければならなくなった。不潔恐怖症であれば、他人が口をつけたものには口をつけることができないのが普通である。ところが、A君はそのようなことに頓着しない。私は、更に観察することにしたが、「きたないよ！」とA君がいった時に、A君の母親ならばどのように反応したろうか———と思いやった。あるいは「まあ、きたないわねえ！」とオーバーな発言があったのではなかろうか。子どもの言動は、養育者の言動によく反応する。養育者の言動は、養育者のハースナリティの表現であるから、養育者のハースナリティが子どもの言動に反映する。A君の母親は、どのようなハースナリティの人なのであろうか。

合宿地について、その日のその夕飯にはチキンライスがだされた。その中には、肉がたっぷりはいっている。それに対して、A君はどのような反応にでるであろうか。私は様子を見た。ところが、空腹であった他の子どもといっしょに全く抵抗なくベロッと平げてしまったのである。

これには全く驚いてしまった。就学猶子の一つの原因になっ

ていたのに……。ただし、その後の食事には、いろいろ文句をつけ、厭だと思うとその食餌に手をつけようとはしなかったのである。いわゆる、わがままなのである。

夜、就寝前に歯を磨く。その時も、歯ブラシを他人が近づくとするとところにおいて、練歯磨きのチューブをいたずらしている。不潔恐怖症どころか鈍感症である。翌朝も、ボタンを二つもかけちがえたまま洋服をきている、生活習慣の自立ができていない。結局、不潔恐怖症などではなかったのである。

合宿を終えてから、両親へのカウンセリングが始まった。合宿までは子どものことに関心の薄かった父親が、合宿を契機として、子どもの問題行動の解決に熱意を示し始めた。母親の訴えによると、次のごとくである。夫の協力も得られず、夫のころのつながりも薄く、それだけでも不安が強かったのに、姑とも折り合いがうまくいっていない。ことに、姑に激愛された上の子で失敗したので、A君は何とか自分の手でよく育てようとしたが、どうにもうまくいかない。その焦慮が強かったし、夫や姑と心の交わりのうすいことから、A君だけは自分のもとから離すまいという気持ちで動いていた。母親にも不定の身体症状——恐らく精神身体症状——があり、ちょっとしたことでも吐いたりするので、A君の嘔吐には人一倍敏感であり、同情的であった。A君の問題は、むしろ母親の問題であったのである。

幸い、父親の協力も得て精神の安定を取り戻し始めた母親は、しつめるべき時にはきちっとしつけ、可愛がる時にはじゅうぶん可愛がるという体制を身につけ始めた。それとともに、A君は友だちとも遊ぶようになり、無事に就学した。三年生の時には、クラス委員に選ばれるまでに立派に成長したのである。

多くの例と同様に、この母親も、A君の性質は生れつきが大きく関係していると考えていた。しかし、合宿中に、少しも引込思案の行動を示さなかったという報告によって、A君の性質を見直すこともできるようになった。母親自身、いらいらして神経質な性質だと思っていたのを、見直すことになった。

子どもの性格は、環境によって大きく影響される。ことに、母親の心の持ち方によって左右されることが多い。これを逆にいえば、子どもの性格は可変性であり、成人についてもそれを行うことができる。

(二) 兄弟の性格のちがひ

「同じ親が育てているのに、兄の方は引込思案であり、弟の方が積極的な性質であるのはどういうわけでしょう？」と質問する母親があるにちがいない。兄の方は私に似ており、弟の方は父親に似ているという母親もあり、その際に遺伝（染色体を

通じて現われる性格）と思い込んでいた。この思い込みが、子どもの性格に大きな障害を与えている。すなわち、思い込みは、とらわれのころを形成する。「うちの子どもは、このような性格の持ち主である」ことにとらわれていると、その性格を変えようという努力が生じない。どうせ、うちの子どもはこの程度だ——という気持ちが根を下ろしてしまう。母親の中には「うちの子どもは消極的なので、そうした子どもに適した小学校はないでしょうか？」と質問する母親もある。性質の可変性を見失ってしまっている。保育者の中にも、そのような人がいる。

兄弟の間で、兄が引込思案であったり神経質であるのは、多分に養育態度の影響をうけている。ことに、初めての子どもに対しては、両親の不安は大きく、それだけに養育の過剰が起きやすい。保健所に通って育児相談などを熱心にうけるのも最初の子どもの時である。ちょっとした異常をも見逃さずに心配し、医師を訪問する。だから、弱い子どものようにさえ見えるのである。ところが、二番目となると、最初の経験が母親に大きな自信を与える。育児相談にもいなくなるし、予防注射さえも忘れていることがある。熱をだしても、一晩様子を見ることにしたりする。養育の手を抜くこともじょうずになる。とにかく、のんきだし、おしめにしても玩具にしても、上の子どもの

もので間に合わせにすることも多い。いわゆるセコハンボーイになる。新しい玩具などを買い与えると、上の子どもが奪ってしまう。人生の初期から、自分を奮るために、根性が養われて、闘争的となる。

父親の養育態度も、初めの子の時と二番目の時とは異なることが少なくない。初めての子どもの時には珍しくもあり、熱心に養育に参加したりすることが多いが、二番目となるとあきってしまった、「お前まかせ」になったりする。そして宴會族になったりすることも少なくない。

このように、子どもを養育している環境は刻々に変化しているし、親の意識は初めの子どもに対する時と二番目に対する時とは、非常にちがっているのである。従って、同じ親が育てているといっても、全く異なった意識の親が育てている場合もあるのである。そこに、兄弟の性質がちがってくる所以がある。

(三) 一卵性双生児の研究から

人間の性格が遺伝によって規定されることが大きいか、あるいは環境の力が大きいか——この謎を解く鍵として、一卵性双生児が研究の対象に選ばれている。一卵性双生児は、一つの卵子の中に一つの精子が入り込んだ(受精した)ものであるから、

同じような遺伝質をもっているはずである。ことに形質的なものは、例えば、目・眉・まつげ・鼻立ち・唇・歯並び・指紋などは極めてよく似ている。身長もよく似ている。これらは、別々の環境で育てられても、よく似ている。そこで、性格はどうかということになるのであるが、今日まで、性格の遺伝は証明されていないのである。ある研究では、深層の基本的性格はよく似ているが、対人的な性格は環境によると結論しているが、何をもちて基本的性格とするかについてはなお問題があり、また、学令期の子どもたちを対象とした研究であるから、乳幼児期をもっと問題としなければならない点で、直ちに肯定することはできない。

われわれの一卵性双生児の研究では、年寄りが主になって育てると、泣き虫になり、引込思案となりやすい。そこで養育者を逆にして、母親によって育てられてきた子どもを年寄りに育ててもらおうようにすると、今度はその子どもの方が泣き虫になり、臆病になったりする。一方の子どもを乳児院で育て、他方を家庭で育てた例についての報告があるが、この場合、二人の性質の間には非常に大きな差が生じている。

このように、性格の遺伝については、それが認められそうであるが、いざとなるとはっきりしていないことなのであって、母親や保育者が子どもの性格を遺伝(素質)と思いついでいる

ことは、非常に危険な思想というべきであろう。

(四) 引込思案と自律神経失調など

医学を学んだ者は、引込思案の子どもが自律神経の不安定性を持ってはいないか——と考へたくなるものである。すなわち、何かの神経学的な特徴を見出そうと努力する。われわれも、その点について、いろいろと検査を行なつてみた。例えば、ウェンジャーテストとか、起立性障害の有無などを三年間にわたつて検査してみた。しかし、引込思案の子どもに、そのような傾向は認められなかつたのである。従つて、自律神経の不安定な子どもが引込思案になりやすいといふことはできない。引込思案であると、自律神経の失調を招きやすいといふこともできない。このような医学的な研究の方向は、更に精度をよくすれば、あるいは何らかの結論が得られるかも知れないが、因果関係については慎重に考へなければならぬ。

また、運動機能に問題がある子どもに引込思案が多いのではないかといふ考へ方も浮んできた。そのために、引込思案の子どもに対して、各種の運動機能を用いることを試みたのである。そして、正常と見なされている子どもとの比較を試みたけれども、結局は何ら差を認めることができなかつた。中には、こつこつと耐久性を計るテストに応じてよい成績を示した子ども

もあつた。

このように、自律神経機能からも、運動機能からも、引込思案の原因となるような原因を見出すことができなかった。ただし、生活史の中で、長期にわたる病氣を経験した子どもは、どうしても過度の養育を受け、友人と遊ぶ機会に乏しいところから、引込思案になる症例があることは認められた。しかし、これは、二・三の例に止つてゐる。

(四) 引込思案の型と原因

合宿を中心に、引込思案の子どもの研究を続けてきたわれわれは、六年間の経験を重ねてみて、引込思案にもいくつかの型があることを知つた。しかも、その型は引込思案の原因とも関係し、同時に治療とも関係するのである。

引込思案の型は、大体三つに分れる。第一の型は、集団参加の欲求が少なく、誘つてみても積極的に入ろうとしない。その反面、自分本位の活動には熱心で、その範囲においてはなかなかよい活動の成果を挙げる。例えば、虫取りに熱中したり、絵や工作などに熱中して、それをよくする。それ故、その限りにおいては、子どもにまかせることができるとは、集団に入らうとしない。それ故、集団に入らうといつても、それは引込思案ではなく、自己中心のといふことができる。その際、生活習慣

の自立が確立していき、しつげがゆき届いている場合と、A君のごとく生活習慣の自立がよくできていない子どももあって、そこに差がある。生活習慣の自立ができていない場合には、両親がしつげに注意している人ではあるが、共稼ぎなどで、子どもとの接触も少なく、友だちも近隣になく、結局、一人遊びが多く、その範囲で自分を充実し、その楽しみを知っており、友人と慣れ親しむということができない。その気持ちに乏しく、むしろ、自己本位の活動を主張するようになる。

一方、生活習慣の自立ができていない場合、すなわちきちっとしたしつげができていない場合には、親に対する依存的な行動が見られ、それがあたかも引込思案のようにみえるが、結局は自己中心的な主張が多くなって、わがままな行動が多く認められる。

このように考えてみると、これは引込思案の範疇の中で扱うべきでなく、自己中心的な行動と見なす方が適當である。前者では、両親との親密な関係の中で、対人関係を楽しむという経験を持たせるとともに、友人を与える機会を作る努力をすべきであり、後者では、生活習慣の自立をはかりながら、ことにA君のような場合には家族関係の調整を行ないながら、しつげを実現していくことが必要となる。

引込思案の型の第二のものとしては、友人と遊ぶ気持ち

が乏しく、もっぱら大人に依存し、生活習慣の自立もあまりよくできていないし、自分で自分の生活を楽しむことをしない。すなわち、全く大人へ依存して生活している乳児的な存在である。

このような子どもの家庭は、多くが複合家庭——すなわち年寄り又はそれに代る人がいて、子どもを溺愛し、子どもに奉仕している。独立心・獨創性に乏しいのも特徴で、家庭においては結構威張っている。しかし、いったん家庭外にでると畏縮し、もっぱら大人に頼り、大人に奉仕を求めるのである。

このような子どもに対しては、生活習慣の自立を促進し、独立心を養うことをしなければならぬ。それには、年寄りの影響を少なくすることが必要となるが、そのような家庭では年寄りの権力が強く、母親の発言権が非常に弱い。従って、母親は何とか子どもにも独立心を与えようと願いながらも、それが実現できない苦悩を味わっている。合宿後のカウンセリングや遊戯療法をすすめても、年寄りの反対に会って、実現されない例が多い。もともと、合宿に参加することにも賛成でなかったという年寄りがいるわけである。幸い、合宿を契機として、両親の協力態度が整い、意を決してアパートに別居することに成功して、以来、子どもの行動はどんどんと積極的になった二例を経験している。この型に属するものが、予後はよくない。

第三の型としては、集団参加の欲求は認められるが、なか

か入ることができない。自己活動よりも集団に参加したいという欲求が認められ、しかも、生活習慣の自立はよくできているので、大人に依存するという行動は少ない。このような子どもは、両親又はその他の家族から、「よい子」のワクをはめられていて、両親はよい子に対する欲求を強く子どもに示しており、その点で日常のしつてもきちっと行なわれている。しかし、よい子への欲求を背負わされているだけに、子どもは子どもらしい活動ができにくく、行動が型の通りに行なわれるという傾向がある。

このような子どもに対しては、子どもの独創性を認め、禁止のない環境におくとともに、両親の中にある価値観をかえるための努力をしなければならぬ。それには、アクスラインなどの考え方に基づく遊戯治療と、両親へのカウンセリングを行なうことにより、よい効果を期待することができる。幸い、核家族が多かったので、それらを実現することができて、治療の効果をあげることができた。

むすび

以上から、合宿後一―二年以上を経てどのような状態になっているか予後調査を行なってみたところ、七四％によい成績をあげることができた。効果のなかった例、あるいは悪化した例

を検討してみると、それらの多くが複合家族で年寄りがいっしょに住んで権力が強く、合宿後のカウンセリング及び遊戯療法をすすめてみても、それに応ずる態勢ができなかったことを認めた。

いずれにしても引込思案の合宿を通じてしみじみ思われることは、子どもの性格というものは、可変性のものであるということである。すなわち、いろいろな方法によって家庭環境をかえ、あるいは親の意識をかえることによって、子どもの性格をかえることができるということである。従って、われわれは子どもの環境を子どもの人格形成に望ましい状態になるよう、あらゆる努力を重ねていかなければならない。それが、子どもの仕事にたずさわるものにとって、非常に重要な決意であることを、しみじみ思い返す昨今である。

―附記―

今年、これまでに合宿に参加した子どもの合宿を試みようとして準備している。すでに積極的に七三名の申し込みがあり、すでに中学生になっている子どももあるが、合宿が子どもたちにとって楽しい思い出となっていることを知って、私どもの仕事が無意味でなかったことに、感激を新しくした。その成果については、報告する時機を得たいと願っている。